【 むく　はとじゅう 】

椋鳩十

１９０５（明治３８）年～
１９８７（昭和６２）年

信州喬木村が生んだ児童文学作家。
『大造じいさんとガン』をはじめ、全国の教科書に取り上げられている動物物語が数多くある。
「お母さんの声は金の鈴」といって「母と子の二十分間読書運動」を推進し、1972 年（昭和 47）年読書運動により文部大臣賞受賞。

椋　鳩十
喬木村椋鳩十記念館所蔵

生い立ち

椋鳩十は、長野県下伊那郡喬木村阿島に父金太郎、母たきの二男として生まれた。本名は、久保田彦穂といった。少年時代は南アルプスの伊那谷で育ち、飯田中学校を経て法政大学に進み、卒業後鹿児島の中種子高等小学校の教員となった。しかし２ヵ月ほどで同県の加治木高等女学校に変わってからは、教職と同時にペンネーム「椋鳩十」としての文筆活動を行っていた。

ジャック・ロンドンの『南海物語』に感銘を受け、南洋に憧れたことと、姉が鹿児島で医師をしていたこともあって鹿児島で暮らすようになったが、故郷の南アルプスがなつかしく、山の生活を想起させる作品を多く手がけた。

『人間・出会いのすばらしさ』
椋鳩十／著　あすなろ書房／発行

そんな少年時代の南アルプスの山歩き体験から野生動物に関心を抱くようになり、1938（昭和 13）年、雑誌『少年倶楽部』に動物小説『山の太郎熊』を発表、その後次々と動物を中心に描いた名作を生み出し、児童を対象とした動物文学の礎を築いた。また、『大造じいさんとガン』は、狩人のじいさんとがんの群れの頭領である残雪との戦いを描いた作品であるが、描かれている登場人物の心情表現はもちろん、情景描写も優れており、子どもたちに感銘を与えるものとなっている。

動物文学を大成

1950（昭和 25）年に出版された『片耳の大シカ』は文部大臣奨励賞を受賞し、検定教科書に採用されるなど、動物作家としての地位は不動のものとなった。

「私は昭和 13 年に動物物語をね、二十ばかり書きました。そしたらすぐレッテルをはられた。人間という奴はね、良いレッテルをはられるといい

喬木中学校校門横に建てられている「感動は人生の窓を開く」の句碑

喬木村にある椋鳩十の墓碑

けど、変なレッテルをはられた場合にはね、えらい目にあいますよ。レッテルどおりに歩かされるというのは、レッテルのもつひとつの特異性ですな。」鳩十は、『お母さんの声は金の鈴』の冒頭でそんなふうに述べている。これは、動物作家として長年書き続けることの大変さが窺える言葉である。

読書活動を推進

“「椋先生の講演は、なんど聞いてもいつも新鮮で感動的だ」という声は、あちこちでよく聞かされた。野武士のような、一種独特な風貌と、信州訛りの、ゆったりとした言葉で訥々（とつとつ）と語る椋さんの話には、つねに人の心をほのぼのと包みこむ優しさと暖かさにあふれていた。”これは、たかしよいちが著した『人間・出会いのすばらしさ』に添えられた言葉である。

鳩十は、図書館活動に熱心であった。その活動が認められ、南日本文化賞（1955 年）、西日本文化賞（1958 年）を受賞しているほどである。

1947（昭和 22）年鹿児島県立図書館長となり、「母と子の 20 分間読書運動」を推進し、全国に広めようと日本各地を講演して回った。そうした間にも数々の優れた作品を残した。

故郷喬木村とのつながりは深く、事あるごとに訪れていたが、1978（昭和 53）年に鹿児島女子短期大学教授を退任してから、翌年に喬木村阿島に別荘を建て、夫妻同伴で夏を過ごすこともあった。飯田市や喬木村で小中学生やPTA、教師、市民など各団体に向けてさまざまな講演を行ったが、どの講演にも鳩十の人柄の滲み出た心暖まる内容であったという。

1987（昭和 62）年には、NHK 教育ＴＶ「シリーズ授業」で母校喬木第一小学校五年生に「生きものはすばらしい」のテーマで授業を行い、全国放映された。このとき別に行った講演「少年の日の感動」が、母校での最後の講演となった。

椋鳩十は今、南アルプスの谷間にあるなつかしいふるさと喬木村に眠っている。（上写真）

【受賞作品】

『大空に生きる』小川未明文学奨励賞
『孤島の野犬』
サンケイ児童出版文化賞
国際アンデルセン賞国内賞
『マヤの一生』
第一回赤い鳥文学賞、
児童福祉文化奨励賞
『モモちゃんとあかね』赤い鳥文学賞
『椋鳩十の本』など文学界への貢献
第三十三回芸術選奨文部大臣賞

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
山窩調	1933（昭和 8）年
大造じいさんとガン	1941（昭和 16）年
月の輪熊	1942（昭和 17）年
片耳の大シカ	1950（昭和 25）年
大空に生きる	1961（昭和 36）年
孤島の野犬	1963（昭和 38）年
マヤの一生	1970（昭和 45）年
モモちゃんとあかね	1971（昭和 46）年
におい山脈	1972（昭和 47）年
ネズミ島物語	1973（昭和 48）年
にせものの英雄	1977（昭和 52）年